

「総合的な学習の時間の授業設計についての一考察」

－ 指導と評価の一体化をめざす評価指標の開発を中心として－

所属校：豊島区立椎名町小学校

氏名：梶 義 典

派遣先：玉川大学教職大学院

キーワード：指導と評価の一体化 ポートフォリオ評価 ルーブリック 自己評価力

I 研究の目的

総合的な学習の時間は、先行実践も含め、数年間の実践において成果や課題が明らかにされ、平成 15 年 10 月に学習指導要領一部改訂において、目標や内容の明確化、全体計画の作成、各教科等との関連をより一層図るよう改善が求められた。その後、平成 20 年の中央教育審議会答申にも、課題として引き継がれ、この学習がねらっている資質や能力、態度が十分身に付いていない状況がみられる。

新学習指導要領実施に向け、これからの総合的な学習の時間をより一層充実したものになるよう、改善を図っていくことが重要である。そこで本研究では、指導者の目標設定と児童の自己評価力の向上を目指す評価活動から改善しようと考えた。

総合的な学習の時間の評価活動として定着しつつあるポートフォリオ評価を一層推進していくために、評価指標（ルーブリック）の開発を行う。開発を通して、指導者の目標設定を確かなものにし、児童に自己評価力を高めることができるような評価指標（ルーブリック）の作成や授業への活用方法を探り、指導と評価の一体化を図る授業設計のモデルについて考察することを目的とする。

II 研究の方法

1 総合的な学習の時間における評価の観点や評価基準の設定についての課題を明らかにして、評価指標作成の必要性を検討する。

2 ポートフォリオ評価の在り方と課題などから評価指標を導入する意義を検討する。

3 指導者の授業設計に生かすための評価指標と児童の自己評価力の向上のための評価指標を開発する。

III 研究の結果

1 総合的な学習の時間の評価の課題

(1) 調査結果から

総合的な学習の時間の評価は、観点別学習状況の評価を基本とし、各学校が観点設定し、指導を行うことになっている。そこで、現行の学習指導要領の基で、

どのような観点設定が実際に行われたのかを調査した。（「総合的な学習の時間実施状況調査」平成 18 年 3 月、文部科学省）

①「ねらいを踏まえた観点設定」 約 49%前後、

②「教科との関連を明確にした観点設定」

（教科の 4 観点と対応している） 6%前後

③「各学校の定める目標・内容に基づいた観点設定」

約 13%前後

残りの 30%前後は、三つの視点を二つ、ないし三つ組み合わせて設定している。

さらに、各都道府県の総合教育センター等で公開されている総合的な学習の時間の指導案から、各学校が設定している評価の観点を抽出した。かなりの多様性が見られ、8~9 という多くの観点を設定している学校や、課題解決能力だけの設定などが見られる。

これらの調査結果から、身に付けようとする資質や能力について、観点設定があいまいになると、学年での系統性が図れなくなると考える。総合的な学習の時間は、各学校が特色ある教育活動を進めるために自校版学習指導要領を作成するという点から、どのような育てたい力を求めるかという目標設定を明確にすることは大変重要である。

(2) ポートフォリオ評価の意義と課題

ポートフォリオ評価は、学習活動の蓄積が見える、個別化した課題に対応できる、自己評価の力を高めることができるなどの意義をもつ評価方法である。

ポートフォリオ評価は、欧米ではおおむね次のような手順で進められている。

①目標を決める ②作品や資料を集める ③蓄積する ④検討会での自己評価 ⑤評価指標に沿って選択する ⑥まとめる（発表・報告等）

この手順で注目したいのは、①目標を決める ⑤評価指標に沿って選択するという点である。指導者と児童が目標を共有し、活動の見通しをもたせ、ポートフォリオにするべきものを見通しをもたせて活動させているということである。集めた作品や資料を価値付け

るために、評価指標に沿って選択するというのである。活動の価値を高めていくためには、何か評価の基になる指標（基準）が必要ということである。

2 評価指標（ルーブリック）の開発

ルーブリックは児童の学習成果を評価するための評価指標である。思考力や判断力、表現力などの高次の学力を評価するために、評価規準(criterion)や評価基準(standard)、評価資料をセットにしたものである。

あらかじめ指導者が児童を評価するための評価計画（指導計画）を作成するため、指導者の授業設計に生かす視点をもたせるためのルーブリックとして作成する。このルーブリックを「教師用ルーブリック」と定義する。また「教師用ルーブリック」を基に学習活動の中で、活動の支援資料とともに、児童が自己評価に活用するルーブリックを「子ども用ルーブリック」とし、「教師用ルーブリック」を修正して作成したものとして定義する。

(1) 「教師用ルーブリック」の作成

「教師用ルーブリック」は、アメリカのルーブリックや国内での先行事例などを参考にして、新学習指導要領に示された三つの視点に沿って観点設定や評価規準の設定を行い、どの単元でも活用可能なルーブリックのモデルを作成する。アメリカでのルーブリックは、評価基準が3段階から6段階に分かれているものが多い。そこでこれらのルーブリックを分析し、現行の評価に関する日本の制度に合わせて3段階で整理していく。

次の手順で「教師用ルーブリック」を作成する。

- ①評価規準を設定する。
- ②評価規準に合わせて、望ましい児童の活動状況を記述してみる。
- ③児童の活動状況を質的なレベルに分ける。
- ④質的なレベルを3段階に集約し、表にする。

この「教師用ルーブリック」を基に、単元の学習活動に合わせて、単元の評価規準や評価基準、評価資料を計画した単元計画を作成する。

(2) 「子ども用ルーブリック」の作成

単元計画が作成し、学習活動を想定することで、その活動に合わせた評価計画を行う。「教師用ルーブリック」を児童が自己評価活動に活用できるように分かりやすくルーブリックを作成する。作成に当たり、次のような事を考慮した。

- ①児童が学習活動を見通せるようにする。
- ②総合的な学習の時間で身に付ける資質や能力、態度は、長期に渡る成長をみていくため、単

元の中で一度限りの評価にせず、複数回評価できるようにする。

- ③児童が簡単に短い時間で評価できるものにする。
- ④想定した学習活動と異なった場合の修正ができるようにする。
- ⑤相互評価できるようにする。
- ⑥いつでも確かめやすいように、学習カードの形式にする。
- ⑦評価に関連する記述は、児童に分かりやすいものにする。C「もう少し」の記述は、「～できない。」といった否定的な用語は使用しない。
- ⑧一時間ごとに自己評価や相互評価ができるようにする。自由に評価を言葉で書けるようにする。
- ⑨単元終了後に、自分の言葉で表現する振り返りができるようにする。

(3) 「子ども用ルーブリック」の活用

「子ども用ルーブリック」は、指導者と児童が評価を共有するという目的から、単元の導入時や授業の開始時にこのカードの読み合わせをし、評価項目を確認する。児童にとっては、学習の流れが確認でき、見通しをもつことで学習への意欲を高めることができる。さらに、自分の成長を記録しながら学習することで、自分の成長を実感することができる。

指導者は学習活動での観察と共に、記入された事柄を授業後にチェックしていくことで、一人一人の学びのよさや成長を確かめることができる。また、つまづきの見られる内容では、次の指導の改善に活かす事ができる。このように指導と評価の一体化を図るための手だてを学習過程に合わせて検討した。

IV 考察

1 成果

ルーブリックを作成し、活用することにより、次のような効果がある。

- (1) 指導者は、児童を評価する視点が明確になる。
- (2) 指導者は、授業での指導や支援をより充実できる。
- (3) 児童は、自分の目標がはっきりし、自分で学習の方向性を見通すことができる。
- (4) 児童は、自分でよさや課題に気付くことができる。

2 課題

学習活動を充実させ、児童の自己評価力の向上には、さらに次のような視点で改善を図る。

- (1) 児童の活動の様子を蓄積して基準になる記述へ反映させていく。
- (2) 発達段階や実態に応じて活用方法を工夫していく。